

## 【講演記録/東方斎・荒尾精先生追悼式】

## 京都・若王子の荒尾精を追悼する記念碑

一般財団法人霞山会文化事業部課長・主任研究員 堀田 幸裕

(2019年10月26日、東京谷中の全生庵)

皆さま本日はお参りお疲れさまでした。一言挨拶をとのことですが、この場を借りて京都で行われた荒尾精の追悼祭(10月19日)の様子についてご報告をさせていただきますと思います。皆さまが本日お参りました、こちら全生庵に荒尾精のお墓があることは比較的知られております。一方で、京都・若王子にも荒尾精を追悼する記念碑があるのはご存知でしょうか。実はこちらのお墓よりもはるかに立派な巨大な石碑で、そこに刻まれた碑文の内容というのは漢文で非常に長く、これを読み下した資料もあるのですが、それを見ても現代からすると結構難解なのです。

この碑文にまつわるエピソードを少しご紹介いたします。碑文には、近衛篤麿撰文と刻まれていまして、近衛篤麿が荒尾精を追悼する文章を書き、その文章がこの石碑に刻まれたという経緯が表向きの解釈です。しかしながら、いろいろ調べてみますと、実は近衛篤麿が作ったとなっているこ



の長い漢文の文章の本当の作者は、荒尾精が台湾で亡くなるのを看取って、遺骨を日本に持ち帰った内村邦蔵(退帯)なのではないかと言われています。インターネットで検索いただくと、京都市歴史資料館のウェブサイトには荒尾精の記念碑を解説・紹介したコーナーがあります。

(<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/ishibumi/html/sa248.html>)

その中でも触れられている内村邦蔵の文章を集めた『退帯遺稿』(内村久子編、立命館出版部、1941年)という線装本がございますが、この本を私も直接入手しまして確認しましたところ、確かに碑文と全く同じ文章が載っています(同書、巻中第二篇冒頭)。

では、近衛篤麿は担がれて名前だけを利用されたのでしょうか。実はそういうわけでもなく、もう少し詳しく調べてみますと、これもややこしい経緯があるのです。京都



の記念碑は、大正 5 年（1916 年）にできています。荒尾精が亡くなったのは明治 29 年（1896 年）ですから、つまり死後 20 年も経ってから記念碑は完成したたわけです。この記念碑を作ろうという動きは、荒尾精が亡くなった直後から関係者の間でございました。そして記念碑を作るための実行委員会のようなものが結成されて、当時まだ存命だった近衛篤磨が乞われてその發起人を引き受けるという経緯が、近衛篤磨の日記に記録として残っています（『近衛篤磨日記第一巻』鹿島研究所出版会、1968 年、132 頁）。ですので、近衛篤磨が全くあずかり知らないところで、篤磨自身がもう亡くなっている大正 5 年に石碑ができて、勝手に近衛篤磨が書いた文章として碑文が作られたわけではなさそうです。ここからは推測の域を出ませんが、恐らく近衛篤磨が生きている間に碑を設立する準備をしていた関係者で何らかの了解があって、その素案は内村邦蔵が書き、近衛篤磨がこれを認めるという手続きを踏んでいたのではないのでしょうか。しかし建設資金集め等が難航して、記念碑ができるまでに 20 年という時間を要してしまっただけです。

さらに一つエピソードを付け加えますと、この荒尾精を追悼する碑文には面白いことが書かれています。

冒頭、1 行目には近衛篤磨撰であることが記されており、次の 2 行目です。陝甘総督の升允という人が銘を作り、書を書いたと記されています。つまり、京都のあの巨大な荒尾精の石碑に刻まれている書体は、この清朝の陝甘総督を務めた升允という人物が書いた書であり、さらに碑文の最後に四文字熟語のように 64 文字が並んでいるの

が銘ではありますが、この部分も彼の作だということです。

京都の荒尾精の記念碑というのは、追悼の漢文を書いたのは直接荒尾をよく知る内村邦蔵で、恐らく近衛篤磨がそれを認めた。そしてさらに石碑建造にあたり、篆刻する書は清朝の元官僚が筆を執ったという、ユニークな合作なのです。

さらに言うなら、この長い荒尾精の追悼文の中には、日清戦争で日本が勝利したことに対する貢献という内容が登場します。この書を書いた升允という人は、清朝に対して無二の忠誠を誓ったという人だったので、内村邦蔵が書いた文書を提示して書を依頼すると、自分が忠誠を誓った清朝を日本が打ち負かしたという内容に気分を悪くして、訂正に次ぐ訂正で色々と宥めつつ何とか書いてもらったという話が、菊池貞二（書院 5 期生、盛京時報主筆）の随筆集『秋風三千里』（南北社、1966 年、23-24 頁）に登場します。荒尾精と中国の関係を物語る上でも、非常に興味深いのではないかと思います。

ぜひ京都にお越しになる際には、京都中心部からは少し外れますが、左京区は南禅寺隣まで足を運んでいただき、この荒尾精の記念碑を一度ご覧いただけると、その立派な佇まいが非常によくお分かりになるかと思います。

先ほど少し申し上げたように、荒尾精が亡くなった直後に記念碑を作ろうという運動はあったのですが、資金とか恐らく色々現実的に難しいことがあり、着手できないままになっていました。これを、荒尾精のことを最も慕っていた同志の根津一（東亜同文会幹事長、東亜同文書院院長）が何とかこ

れを実現したいと、日清貿易研究所の出身者で、当時中国とビジネスをやっていた郡島忠次郎という人物に伝えた。すると早々に資金をうまく調達して、やっと大正 5 年に石碑ができたのです。また記念碑が建立されているのは、根津一の所有する敷地の一画です。この記念碑は、東亜同文会や東亜同文書院の初期のさまざまな功労者たちが関わったものであり、霞山会や愛知大学にとっても縁のある史蹟と言えるのではないのでしょうか。

戦後は、滬友会のほうで記念碑を管理し、また追悼祭も行っていたようなのですが、1961 年、正式に根津家から社団法人滬友会が所有権を引き継ぐ形となりました。住宅を建てることもできないような、記念碑が立っているだけの小さな土地なのですが、戸籍登記上は根津家のものになっていたのです。

さらに滬友会が社団法人から任意団体となった 1996 年に、霞山会へこちらの記念碑が譲渡され、現在もこちらの碑を管理（日常적인見守りは若王子神社に委託）しているという状態です。

2010 年に荒尾精の記念碑での追悼祭が復活しまして、その後暫く開かれなかったのですが、2018 年より再び愛知大学の関西地区各同窓会支部の皆さんがいろいろご尽力くださりまして、追悼祭を行っております。愛知大学同窓会の強いネットワークに感謝を申し上げ、東亜同文会・東亜同文書院と、霞山会・滬友会・愛知大学という歴史的な絆を確認しつつ、私のご挨拶と代えさせてさせていただきたいと思います。

